

わが名はイリス。

虹の名前を冠す者。

トレジャーハンター。

——〈星の墜ちた地〉を目指す者である。

崩壊した遺跡。

しかしそれは、遺跡を覆う植物の大群によって、その姿を未だ留めていた。

鮮紅の宿る瞳で、その緑の遺跡を見つめる彼女は、音にもならないほど小さく息を吐くと、それから額に滲む汗を拭った。

——此処は、“たそがれの國”〈ソリスオルトス〉。

水涸れ、大地の変異、病の流行、人を含む動物の凶暴化——彼らは広く“魔獣”と呼ばれている——等々が原因不明に、おそらくは見境なく起こっているために、滅びを眼前に臨みながら、しかしそれに抗う誇り高き日の出の王國おうこく、夜明けの王國である。

暮れゆく大地に立つ彼らの生き様は、人の数だけ存在する。

生きるために知恵を絞る者、黄昏を食い止めんとする者、緑に満ちた新天地を目指す者、今在るものを愛する者——今、此処にも一人、涸れゆく大地の上に立っている者がいた。

彼女の名は、イリス・アウディオ。

肩より少し長い、ふんわりとした鮮やかな橙色の髪を、彼女は一房だけ頭のとっぺんでまとめており、それは彼女が歩くたびにさながら尻尾のように揺れ動いた。

長旅で日に焼けた顔には、鮮紅の瞳がそなわっている。そのつり目がちの瞳は、いつでもことなくぼんやりとして見えたが、ひとたび彼女の心に火が点けば、その紅色は虹の火の粉を宿したようにちかりと煌めくのだった。

イリスが眼前の遺跡に向かって一歩、足を踏み出す。

首に巻いている、まるで電気石のように色が上から下にかけて変化している虹色の薄布が、彼女の一步に呼応するかのようにはためいた。

イリス・アウディオ。

トレジャーハンター。

——これは一人の、夢のために命を燃やす者が歩む、たそがれの旅路の物語である。

遺跡に足を踏み入れると、ひんやりとした心地好い空気が、肌を滑って駆け抜けていった。

此処は、絶滅都市「ゼーブル」と呼ばれる最早朽ち果てた都市から遠く東、こんにち人が踏み入れることはほとんどなく、雨などほとんど降らぬというのに何故か異常に植物が発達している土地、ねったいりん「熱滞林」の奥地である。

熱滞林では、雨が降らないのにやたら温度も湿度も高い風ばかりが吹くため、此処は妙に暑いのだった。イリスはまた息を吐き、再び滲みはじめた汗を拭う。ぬるい風が彼女の頬を滑り、首巻をはためかせた。虹の色は、気怠い熱気を気にも留めず、優雅に揺らめいている。

手で顔の辺りを仰ぎながらイリスはふと、この地の不思議さを想う。

しかし、想ったところで分かるはずもない。ならばこの地が何故、こんな風におかしなことになっているのかについては、その道に詳しい研究者にでも任せておくに限る。

自分はただのしがないトレジャーハンターだ、能が有るとするならば、それは宝を探し、見付けることについてばかり。樂觀的にイリスは思う。ほとんどそれだけを生き甲斐としてきたのだから、それもきつと致し方ないことなのだろう。